

【ポスター発表】

家族介護者に関する情報把握についての指導と実践について ーサービス提供責任者とホームヘルパーへのアンケート調査からー

○ 関西福祉科学大学大学院 博士後期課程 松本 眞美 (8045)

キーワード：サービス提供責任者・アセスメント・スーパービジョン

1. 研究目的

要介護高齢者の増加に伴い、介護職も増加している。在宅の介護を担う専門職としてホームヘルパーがいる。そのホームヘルパーを指導管理し束ねる位置にいるのがサービス提供責任者である。サービス提供責任者は介護保険の運営基準により訪問介護事業所に1名以上おかれることになっている。堀田(2008)が、「ホームヘルパーの定着率の低下の課題について、サービス提供責任者が人事管理機能を発揮することで定着促進につながる」と述べているように、介護人材の量や質の問題ならびに、サービス提供者自身の専門性も問われるところである。武田(2004)は、介護の専門性の議論には「i.介護技術の専門性、ii.専門性に裏付けされた社会的介護を成り立たせるための介護システム、iii.システムのなかに位置づけられた各ファクターの役割・機能・連携」の検討が必要であるとしている。そのシステムの要となるサービス提供責任者に求められる資質は、「訪問介護計画作成能力」「訪問介護員へのスーパーバイズ能力」「対人援助能力」「アセスメント能力・コーディネーター能力」「福祉専門職としての価値・倫理」の5点であるとしている。中でも「訪問介護員へのスーパーバイズ能力」は、単独での訪問や多様性のあるケースが多い訪問介護には必要なものであり、その能力の如何により担保されるサービスの質が決まると考えられる。

本研究の目的は、家族介護者の情報把握を切り口に、サービス提供責任者の指導とホームヘルパーの実践との比較等を行い、スーパービジョンの現状を明らかにすることである。

2. 研究の視点および方法

本研究では、「家族介護者の情報把握の項目」について、サービス提供責任者の指導がホームヘルパーの実践に結びついているかに着目する。また「コミュニケーション・スキル尺度」についても両者を比較することで課題が明らかになると考えられる。質問紙調査票は、職能団体のアセスメント様式や、法令による指導項目や、現場のホームヘルパーへのインタビュー(松本 2012)等から、家族介護者の情報把握に関する調査の質問項目を64項目抽出したものと、援助技術については「コミュニケーション・スキル尺度 ENDCOREs」(藤本・大坊 2007)の24項目を作成者の承諾を得て使用し、合計88項目を使用し作成した(松本 2014)。サービス提供責任者にはその項目について「指導しているか」を問い、ホームヘルパーには「実践しているか」を問いとした。調査方法は、A県の「介護サービス情報公表センター」の2014年7月現在のデータを閲覧し、全介護保険訪問介護事業所3,423件から無作為抽出法で200件の事業所を抽出し、当該事業所の2名、合計400名を

対象に郵送調査を実施した。情報把握については、「非常によくあてはまる～全くあてはまらない」の6件法、コミュニケーションスキルについては「かなり得意～かなり苦手」の7件法で回答を得た。調査期間は2014年7月末日～8月末日であった（有効回収率は26%.N=104）。分析方法は、 t 検定である。一つ目は、サービス提供責任者とホームヘルパーの家族介護者の情報把握項目の差の検討を行うために、家族介護者の情報把握の全項目について行った。二つ目は、サービス提供責任者とホームヘルパーのコミュニケーション力の差の検討を行うために、コミュニケーション尺度の全項目について行った。統計解析にはIBM SPSS STATISTICS 22を使用した。

3. 倫理的配慮

本研究は、関西福祉科学大学倫理委員会にて承認を受け、日本社会福祉学会研究倫理指針に則って実施した。対象者に研究の趣旨や匿名性の確保、データの管理方法、研究目的以外でデータを使用しない旨を文書で説明した。

4. 研究結果

一つ目の情報把握の項目に関する t 検定の結果は、「健康状態の把握」「虐待把握」「介護保険の理解」の項目についてホームヘルパーよりもサービス提供責任者の方が有意に高い得点を示していた($t=-3.12, df=102, p<.05$ $t=-4.55, df=102, p<.001$ $t=-3.55, df=101, p<.01$)。下位尺度得点からみるとホームヘルパーは「情報把握の共有の方法」が1位であった。二つ目のコミュニケーションに関する項目の t 検定の結果は、「相手の考えを発言から正しく読み取る（解読力）」、「相手の気持ちを表情から正しく読み取る（解読力）」、「感情的な対立による不和に適切に対処する（関係調整）」の項目において、ホームヘルパーよりもサービス提供責任者の方が有意に高い得点を示していた($t=2.19, df=101, p<.05$ $t=2.06, df=100, p<.05$ $t=2.01, df=101, p<.05$)。下位尺度得点は、ホームヘルパーの方が「他者受容」で得点が高く、ほかの項目はサービス提供責任者の得点が高かった。

5. 考察

サービス提供責任者が、「家族関係と心身の状況」の把握をするように指導していても、それほど実践されていないのは、ホームヘルパーが重きを置いているのが現場での情報を共有することにあるからだと考察できる。「家族介護者の介護保険の理解程度」の把握については、自分の役割とっていないホームヘルパーがいる可能性や、介護保険外の部分に重きを置いている可能性があるものの、介護保険を理解していないことから起こるクレームなどの予防も含め、ホームヘルパーには理解が求められるところである。コミュニケーションスキルの高い尺度得点などは、サービス提供責任者の「コーディネート能力」などにつながると考察できるが、「訪問介護員へのスーパーバイズ能力」については、ホームヘルパーとの得点差による分析だけであるため、明らかになったとはいえない。スーパーバイザーとしてのサービス提供責任者と、ホームヘルパーの現場での実態の違いの意味について明らかにしていくことが今後の課題である。